



訪問学級で

しても教室に入つて、おはようのあいさつをする前にそれぞれ教室から飛び出してしまった。

「たった子どもたちの教育の場を求めて運動し、1970年に市内の特殊学級を1か所に集めてスクールバスによる送迎、教員の他、介助員、看護師を加配した「共同学習場」を設置させ、障害の重い子の教育の場をつくりあげていきました。あわせて、障害児の通園施設「みずほ学園」も開設されました。5年間の「共同学習場」を経て、もつ

手探しの教育課程、  
学校づくり

開校2年目で、学年ごとのクラス編成でした。私は小学部1年生を担任しました。6名の新入児のうち2名は就学猶予を受けていた子どもでした。3名は

975年に富士見養護学校として開校しました。

## 手探しの教育課程 学校づくり

ラックスさせたり、それぞれやりたいことを一定時間やつてから、教室に戻つて、着替え、あいさつをして一日をスタートさせたらどうか。養護学校なのだ

ラックスさせたり、それぞれやら、教室に戻つて、着替え、あいさつをして一日をスタートさせたらどうか。養護学校のだから多様な集団の保障を工夫していくこうと議論を重ねていきました。

また、学年ごとの学級編成ではなく、小学部1年生から3年生まで合わせると15人ぐらいの子どもたちがいたので、ある程度課題を共有する子どもたちで基礎集団をつくつて、その上で個別的な学習やもつと大きな集団での学習を編成する学部、学級づくりができるかと模索し始めました。

次の年には学級編成の議論が進み、小学部を3学年ごとに2つのブロックとし、その中で5～7名ほどの基礎学級を編成し、課題別の学習を設定、リズム運動は小学部全体で行なうなど日課の流れ、教育課程の構成が具体化されていきました。

## 発達保障インタビュー

バトンゾン→ン

第29回



全障研埼玉支部

細野浩一さん

# 子どもと、なまたちと歩み続けて —教育から福祉へ ろう重複障害者の場を求めて（上）

私は1954年生まれ、今年69歳になります。埼玉県のほぼ中央、関東平野と秩父山系をつなぐ丘陵地にある東松山で育ちました。

全障研全国大会などで出会った障害のある人たちの体験や生き様に大きく刺激され、障害児学校の教員になつて、重い障害のある子どもたちをしつかり受けとめる学校づくり、社会をつくつていきたいとの思いが確固たるものになつていきました。

養護学校、ろう学校で18年間勤めた後、ろう重複障害者の共同作業所「どんどんりの家」の立ち上げをきっかけに教員を辞め、それ以降30年近くろう重複をはじめ成人期の障害のある人たちの福祉に携わっています。

高校生の時、地元東松山で小野隆二さん（故人。障害児施設職員の時に全障研の結成に参加）たちが、障害のある幼児や不就学児を対象にした日曜保育「青い鳥教室」をはじめたことを新聞報道で知り、障害児教育を志すきっかけとなりました。埼玉大学教育学部の設置間もない養護学校課程に入学しました。

大学では障害児問題研究会というサークルに入り、地域の不就学の子どもたちの日曜保育や

小さな町の大きな学校づくり

そうして大学を卒業した1976年に、開校2年目の富士見市立富士見養護学校に赴任しました。富士見市は東京から電車で30分ほどの距離にあり、1960年代に最寄駅周辺に大規模な公団住宅がつくられ、多くの子育て世代が移り住んできました。その中に、障害のある子どももいましたが、地域に何も社会資源がなく、東京の病院や療育機関に通うしかありませんでした。

のとりくみでしたが、教職員がそれぞれの専門や経験を出し合いながら、自分たちで学校をつくるという気概に溢っていました。

富士見養護学校で過ごした7年のうち後半の3年は養護学校義務制実施に伴い設置された訪問教育を担当しました。障害や病気の進行に伴い、体力や発達の退行が進み、スクールバスによる登校が困難となつた3名の子どもたちの家庭を訪問しての教育は文字通り手探りでした。が、手作りの人形や絵本を携えて、うたあそびや散歩などを通じて、その子の新たな一面やいきいきした表情に出会えたことは大きな喜びでした。

さらに、通園施設・保育所の職員・ケースワーカー・親たちとともに全障研サークルでの放課後問題・就学指導・青年学級・卒業後の進路問題などの学習や活動は、地域にねざした学校づくりの裾野をひろげてくれました。  
(9月号に続きます)

きいきした表情に出会えたことは大きな喜びでした。

さらに、通園施設・保育所の職員・ケースワーカー・親たちととりくんだ全障研サークルでの放課後問題・就学指導・青年学級・卒業後の進路問題などの学習や活動は、地域にねぎした学校づくりの裾野をひろげてくれました。  
(9月号に続きます)